



3週間の「やさしい日本語」の学びを通じた日本人学生 の他者への貢献度に対する認識

岡野, 靖子

(Citation)

神戸大学文学部紀要, 52:47*-58*

(Issue Date)

2025

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100494049>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100494049>



3週間の「やさしい日本語」の学びを通した日本人学生の他者への貢献度に対する認識

岡 野 靖 子

1. はじめに

日本は「災害大国」と言われ、各地でゲリラ豪雨や台風などによる洪水、土砂災害、地震や津波、高潮などさまざまな災害が頻発している（内閣府，2024）。自然災害が起きた際、私たちのもとには、安全な場所へ避難を呼びかけるための情報が配信される。しかし、例えば日本語に不慣れな外国人は、その情報を正確に理解できないことで、自らの命や身近な人の命を守るための行動がとれず、被害を受けやすい立場にある。このような立場にある者は、一般に「災害弱者」と呼ばれるが、彼らを安全な場所へ誘導し、公的支援が始まるまでの避難生活で見聞きする情報を的確に伝える必要がある。このことを可能にする手段に、阪神・淡路大震災をきっかけに作られた「やさしい日本語」（弘前大学人文学部社会言語学研究室，2013）がある。

現在、阪神・淡路大震災が起きた当時と比べ、言語・文化的背景の異なる者と共生する社会が進んでおり、大学はそのような者との関係性を構築する多文化共生の場（高橋，2016）にもなっている。また、自然災害に対する支援のあり方を再考しておくことで、災害弱者と呼ばれる人たちが置かれるであろう状況を理解し、よりよく共生するための情報を得ることにもつながる。

そこで本稿では、日本人学生と留学生が共に学ぶ授業で「やさしい日本語」

3週間の「やさしい日本語」の学びを通した日本人学生の他者への貢献度に対する認識

を実践し、この学びを通して、どの程度発災時に他者へ貢献できる存在として自己を認識するようになったかということを、日本人学生の視点から検討する。

2. 先行研究と本研究の目的

「やさしい日本語」の講義に対する受け止め方は、オンデマンド形式による講義の視聴順を操作した準実験的な手法（長谷川・井上，2021）や、市民との対面やオンラインによる交流（山田，2021）、防災チラシの作成課題（轟木・山下，2021）を通して検討されている。これらの研究では日本人学生および留学生を対象とし、学び得たことや認識、考えをどう発展させていったかを中心に考察されている。

本稿の対象とする日本人学生の認識に着目すると、授業形態や活動内容を問わず、共通して他者の立場を理解したり、配慮したりすることの重要性に気づきを得ていたことが明らかにされた。その一方、学習者と異なり、母語話者はことばで説明できずとも、アウトプットする場合に言語を適切かつ正確に使い分けできる（稲垣・鈴木，2011）。この母語話者特有の言語処理ゆえに、言い換えに難しさを覚えたり、果たしてわかりやすくなったのかという問題意識が生じたりした者がいたことも報告された。

このほか、甚大な被害を及ぼした東日本大震災が発生した2011年以降、災害時には「自らの身の安全は自分で守る」という「自助」の力を身につけることの重要性が説かれている（総務省消防庁，n.d.）。例えば、自助力向上を目的に実施された活動¹では、日本人が外国人との意思疎通に不慣れであることや、「外国人には外国語で」といった固定化された発想があることが、彼らを情報弱者としてしまう要因（近藤・川崎，2015）として明らかにされた。ただし、

1 防災マニュアルを作成するために、留学生が公的機関から防災情報を収集するフィールドワークが行われた。

3週間の「やさしい日本語」の学びを通した日本人学生の他者への貢献度に対する認識

留学生・日本人学生・教員の3者を含む形で行われた実践²では、自助や共助、公助に対する理解が深まり、防災対策や改善策を見出すために協働的な学び合いが重要であることが示唆された（宮城ほか，2014）。このように、高等教育機関で「やさしい日本語」を扱った活動や、自助力向上を目指した防災関連の教育実践が増えてきてはいるものの、以下のような課題も残る。

「やさしい日本語」が作られた阪神・淡路大震災発生当時と比べ、日本においても、多様な背景を持つ者と共生する社会がより一層進んでいる。これは大学においても同様で、多文化共生につながる関係性を構築できる場（高橋，2016）の一つとなっている。また、日本人学生と留学生が協働し災害時の支援のあり方を考えることで、自助だけでなく共助を考えることにつながる貴重な場にもなる。加えて、「やさしい日本語」を学び合うことで、他者にどう貢献できるかということを再考したり、その過程を通して、自身の有用感がどう変わりうるかということを認識したりする機会にもなる。しかし、多数の留学生を受け入れる高等教育機関で両者を対象にした教育実践は限られ、学生に生じる認識の特徴は十分に捉えきれていない。

そこで本稿では、日本人学生と留学生を対象に「やさしい日本語」を実践し、発災時における他者への貢献度に対する認識の実態を、書き換えに挑んだ日本人学生の認識から明らかにすることを目的とする。

3. 実践の概要

3.1. 履修者

日本人学生および留学生がそれぞれ14名、計28名が本授業を履修した。日本人学生は、学部1年から3年に在籍しており、中国地方および中部地方（各

2 災害対応マニュアルの作成や、避難訓練、地震に関するワークショップ、地震に関する知識や情報にアクセスするためのスキル向上を目的とした日本語授業など、さまざまな活動が実施された。

3週間の「やさしい日本語」の学びを通した日本人学生の他者への貢献度に対する認識

3名)や近畿地方(8名)に長く居住している者であった。「やさしい日本語」を知っていた者は5名おり、2名が新聞や記事で、残る3名は図書館や義務教育課程の社会科の授業、ボランティア活動でその存在を知っていた。ただし、この5名のうち、実際に書き換えに挑戦したことがあったのは、ボランティア活動で「やさしい日本語」を知った学生のみであった。また、実践開始前、1名を除き³、本稿の日本人学生において、防災⁴は自分ごととしてあまり考えられていなかった⁵。

3.2. 授業の流れ

「やさしい日本語」は、3週間にわたり授業で扱った。1週目は、主に災害や防災に対して自分に引きつけて考えられるよう、平時の防災意識のほか、人的被害を伴った国内の地震(気象庁, n.d.)や自然災害の経験などを振り返り、それをグループで共有した。また、「やさしい日本語」の概念や基本規則等を紹介した後、書き換え練習⁶を行った。

2週目および3週目は、まず全員を対象に基本規則を復習した後、日本人学生と留学生で異なる処遇を行った。日本人学生には(1)書き換え、(2)書き換えで生じた意識に関するアンケート、(3)書き換えのわかりやすさに対する自己および他者による評価を求めた。一方、留学生には、(1)原文のわかりやすさ、(2)未習語の有無の確認、(3)書き換えのわかりやすさに対する評価を求めた。さらに3週目は、わかりにくかった書き換えについて、どう改善すればよいかをグループで議論し⁷、その内容をクラスで共有した。

3 居住地で自然災害の被害を受けたことがあると回答した者であった。

4 「あなたは 防災について、どのくらい考えていますか」という問いに対し、「1: 全く考えていない」「2: ほとんど考えていない」「3: あまり考えていない」「4: どちらとも言えない」「5: 少し考えている」「6: かなり考えている」「7: とてもよく考えている」の7段階から選ぶよう求めた。

5 $M = 3.71, SD 1.64, Min 1, Max 6$

6 弘前大学人文学部社会言語学研究室(2013)の課題に基づく。

7 「わかりやすかった書き換え」については、クラスでその特徴を共有した。

3週間の「やさしい日本語」の学びを通した日本人学生の他者への貢献度に対する認識

3.3. 材料

日本人学生が「やさしい日本語」を学んだことで、どの程度他者へ貢献できる存在として自己を認識するようになったかを明らかにするため、本実践開始前および終了後に実施した「災害発生時における他者への貢献度」と「そう考える理由」を分析の対象とした。他者への貢献度は、「あなたは災害が起きた時にどのくらい『だれかの役に立てる』と考えますか」という問いに対し、「1: 全然役に立てない」「2: ほとんど役に立てない」「3: あまり役に立てない」「4: どちらとも言えない」「5: 少しは役に立てる」「6: かなり役に立てる」「7: とても役に立てる」の7段階とし、そう考える理由は自由記述回答とした。

3.4. 分析方法

他者への貢献度は、Wilcoxonの符号付順位検定にかけることで、事前・事後における日本人学生の認識の変化を比較した。また、7段階尺度による他者への貢献度についての選択理由も含めることで、この認識の変化を質的な観点からも補完した。

4. 本実践から、他者への貢献度をどう認識するようになったのか

4.1. 事前・事後における他者への貢献度に対する認識

では、「やさしい日本語」を学んだことで、どの程度他者へ貢献できる存在として、自己を認識するようになったのだろうか。

学習前における日本人学生の貢献度に対する評価を確認したところ、総じて「あまり役に立てない」存在として自己を認識していた ($M = 3.29, SD 1.54, Min 1, Max 5$)。しかし、学習後には「少しは役に立てる」や「かなり役に立てる」と感じられるようになっており ($M = 5.71, SD 0.47, Min 5, Max 6$)、3週間の実践を通して、日本人学生の他者への貢献度に対する認識は有意に変化していた ($z = -3.32, p = .001, r = -.89$) ことがわかった (図1)。

3週間の「やさしい日本語」の学びを通した日本人学生の他者への貢献度に対する認識

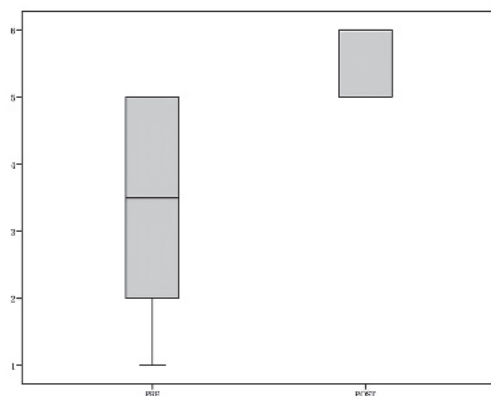


図1 「やさしい日本語」の学んだことによる他者への貢献度

4.2. 日本人学生の他者への貢献度に対する認識

日本人学生のコメントは、その内容から大きく3つに集約された。次項より、「やさしい日本語」を学んだことで生じた認識の変化について考察する。

4.2.1 「やさしい日本語」で他者に貢献しようとする意欲

1つ目は、「やさしい日本語」で他者に貢献しようとする意欲である（図2）。これは4名のコメントに見られ、応用練習を重ねるごとに、書き換えに対する自信は高まっていた⁸ことがわかった。例えば、NS1は3週間の学びを振り返り、「『やさしい日本語』を用いる必要性和そのルールを学ぶことができたので、災害時にそれを使って1人でも多くの人に避難を呼びかけることができると思う。情報を伝え合うこともできると思う。」とも述べていた。また、「留学生の人に私の回答を見てもらって、直接『わかりやすい』という言葉をもらえ、助けられるのではないかという実感が湧いた。」など、練習を通して手応えを感じられるようになっていた（NS2ほか）。

8 この4名を含む日本人学生の「やさしい日本語」で書き換えることに対する自信は、課題を重ねるごとに高まっていたが、詳細は別稿に譲る。

3週間の「やさしい日本語」の学びを通した日本人学生の他者への貢献度に対する認識

- ・今は「やさしい日本語」をある程度学んだので、難しい日本語の文があれば「やさしい日本語」に変えて、在日の外国人の方の役に立てると思う。(NS1)
- ・この3週間「やさしい日本語」の基本を押さえながら、自分なりに課題に活かしてきました。少なくともこの経験で得た知識や書き換えスキルで、「やさしい日本語」を必要とする人を手助けできるように思います。(NS2)
- ・神戸は外国の方も多いので、今回「やさしい日本語」を学んだことで少しは手助けができるのではないと思う。(NS3)
- ・「やさしい日本語」を覚えたことで、英語が喋れない外国人に安全な行動について説明することが少しできるようになった気がする。(NS4)

図2 「やさしい日本語」で他者に貢献しようとする意欲

また、留学生にとって、日本人学生の書き換えは原文よりもわかりやすくなったと、肯定的な評価を得ていた。一般に、他者から肯定的な評価を得ることで、有用感や肯定感が高まる（金井・片田，2015）。本稿の日本人学生においても、この成功体験の積み重ねが、書き換えに対する自信や動機づけだけでなく、発災時に役立つ存在としての自己認識をも高めた⁹と考えられる。

4.2.2 「やさしい日本語」で他者を理解し配慮しようとする姿勢

2つ目は、「やさしい日本語」で他者の立場を理解し、それに配慮しようとする姿勢である（図3）。先に述べたように、課題を通して、留学生から評価やコメントを繰り返し得ることができ、日本語母語話者と日本語学習者としては、「わかりやすさ」の感じ方に乖離があること（NS5）や、通常の日本語では情報が十分に理解できない者がいることに気づくこと（NS6）もできた¹⁰。

9 図2下線部

10 図3下線部

- ・留学生などの外国の方にわかりやすい日本語と、日本人にとってわかりやすい日本語にはかなり違いがあるということを学び、どのような言葉遣いをしたら外国の方にも伝わりやすいか考えることができた。(NS5)
- ・「やさしい日本語」を学んだことで、外国人や子どもなど、情報の理解が難しい人に伝える意識ができた。外国人に情報を伝えることに対して、全く何も考えていないよりも、少しでも考えていた方がより良いと思った。(NS6)
- ・異文化、異言語間のコミュニケーションの相違に対する自分なりの考えや経験が生まれた。コミュニケーションを取るという、生活を送る上での第一歩のあり方を学べた。(NS7)

図3 「やさしい日本語」で他者を理解し配慮しようとする姿勢

このほか「やさしい日本語」を通して、他者とのコミュニケーションのあり方で重要な気づきを得た者（NS7）もいた。コミュニケーションをとる際、相手の理解を確かめながら語や表現を調整すること（庵，2021）が欠かせないように、本稿の日本人学生も「外国人にとって、自分の言い換えがわかりやすいか」を想像し、語や表現の調整に努めていた。

その一方、配信される情報を単にやさしく言い換えるだけで、果たしてその状況を彼らが十分理解できるのかということも疑問視していた。例えば、課題2（列車の運休情報）では、「地震があれば、電車が止まることは日本人にとっては当たり前のことだが、それが外国人にも同じように伝わるのかわからなかった」という声が聞かれた。確かに、日本では地震が発生した場合、震度によって列車が止まることがある（JR西日本，n.d.）。地震が頻繁に起こる日本であるがゆえ、日本人にとっては目新しい状況や対応とは言い難い。その反面、すべての外国人に「当たり前」のこととして受け止められるかは定かでない。

それゆえ、このことに疑念を抱いたNS7をはじめNS5やNS6など複数の学生は、単なる言語面の工夫を超え、発災時に彼らが置かれるであろう状況理解にまで考えを巡らせ、それに配慮しようとしていた¹¹。これは、のちのディスカッションでも、留学生が生活してきた国と日本とでは、自然災害の種類や発

11 図3点線部

3週間の「やさしい日本語」の学びを通した日本人学生の他者への貢献度に対する認識

災時のインフラの状況など、さまざまな違いを知るためのきっかけともなり、実践を通して得られた一つの重要な気づきとなった。

4.2.3 「やさしい日本語」から得た支援方法に関する新たな気づき

そして3つ目は、「やさしい日本語」から得た支援方法に関する新たな気づきである（図4）。この認識の変化は日本人学生の半数にあたる7名のコメントに見られた。4.1でも述べたように、学習前の時点では、日本人学生の災害発生時における他者に対する貢献度は総じて低く、「誰かの役にあまり立てない」存在として、自己が認識されていた。

- ・ 体力がないので自分+誰かを助けるのは不可能であると考えていたが、今回の授業を通して、情報を届けることも誰かの助けに繋がるとわかった。（NS8）
- ・ 以前は、尻付けの手伝いなどの分野では少しは役に立てるのではないかと思っていた。その上で、「やさしい日本語」を少しは書けるようになって、被災した外国人の方のお手伝いも出来るのではないかと思った。（NS9）
- ・ 専門的な知識もなく、力仕事も出来ないが、授業で習ったことを活かして役に立てるかもしれないと考えるようになった。（NS10）
- ・ 以前は居いという意味で体を動かして役に立ったり、自身の音楽をしてきた経験を用いて役に立ったりできるのではないかと感じていた。今考えれば自分のことしか頭になく、今までの学習を活かして情報伝達や配給時の役に立ったり、この授業を通して日本に住む外国人により目を向けて行動できるように少しはなったかと思う。（NS11）
- ・ 災害が起きる前は正直、災害が起きたら誰かの役に立とうという意識すらなかったが、「やさしい日本語」の授業を受けて、例えば、避難所で配られるお知らせや避難所のトイレの使い方のルールなどを「やさしい日本語」に変換することで誰かの役に立てるかもしれないと思った。（NS12）
- ・ 外国人を言語的に支援する方法として「やさしい日本語」があること、その具体的なやり方がわかり、できることの選択肢がひとつ増えた。（NS13）
- ・ 「やさしい日本語」を学ぶ前は、英語があまり話せないのでも、自分がだれかの役に立てると思っていなかった。でも、「やさしい日本語」を使ってであれば、日本語の工夫をすれば、災害時に困っている外国人に情報を伝えたり、状況を説明したりできると思った。（NS14）

図4 「やさしい日本語」から得た支援方法に関する新たな気づき

3週間の「やさしい日本語」の学びを通した日本人学生の他者への貢献度に対する認識

政府広報オンライン（2022）によると、ボランティア支援には一般に、次の3つの特徴があるという。

1. 災害の被害やその範囲の程度が大きくなるほど、被災地以外からの支援が必要になる。
2. 被災直後だけでなく、長期的なスパンで支援が必要になるが、支援内容はどのような自然災害が、いつ起きたかによっても変わる。
3. 時間が経つにつれ、インフラや生活再建に関わる情報に加え、センターの運営補助や各種イベントの開催など、人とのつながりに焦点を置いた支援活動に変化していく。

例えば、「災害ごみ」の分別や撤去などの「力仕事」は、発災後の初期段階で実施されることが多く、比較的体力のある若者が貢献できる役割の一つとして、メディアで取り上げられることも多い。

図4に示したように、本稿の日本人学生においても「体力」や「片付け」「若さ」というキーワード¹²が目立っており、学習前はこのようなボランティア活動で、どれだけ役に立てるか否かを判断していた。しかし、学習後には、身につけた知識や技能を用いて、「やさしい日本語」による情報伝達で役に立てるのではないかと、支援内容を広げて考えられるようになっていた。さらに、具体的な支援場面¹³を思い浮かべた上で、外国人を取り巻く自分たちとの関わりを考え始めたり（NS11）、他者への貢献に対する意識を一新したりした（NS12）¹⁴者もいた。

このように、学習前よりも、日本人学生の自助に対する意識が高まっただけでなく、最も身近な留学生との学びを通して、彼らを含む外国人にどう働きか

12 図4囲み枠箇所

13 図4下線部

14 図4点線部

3週間の「やさしい日本語」の学びを通した日本人学生の他者への貢献度に対する認識
けていけるかを内省することにもつながっていた。

5. まとめ

本稿では、日本人学生と留学生を対象にした「やさしい日本語」の実践を通して、外国人被災者に対する貢献度に関する認識の特徴を、日本人学生の視点から明らかにした。学習前、日本人学生は災害発生時に彼らの役にあまり立たない存在として自己を認識していた。しかし、一連の活動を通して、外国人が置かれた様々な状況に配慮して情報を伝えようとする姿勢や、さまざまな違いを知るために、双方向でコミュニケーションすることの重要性に改めて気づきを得ることができた。さらに、支援内容に対する考えも、それまでの体力を求められる活動だけでなく、情報伝達の面にも拡大し、貢献度に対する認識には大幅な改善が見られた。また、この3週間は自身の日頃の防災・減災対策に対する取り組みを振り返ったり、見直したりする機会になったほか、留学生の評価やコメントから、母語を見つめ直すこともできた。

今後は、参加者の属性や活動形態、実施期間などが異なることで生じる認識の特徴を継続的に検討したい。そして、その認識が一人一人の自助や共助のそれにどう繋がるかを検討し、よりよい防災・減災学習の実践に繋げていきたい。

参考文献

- JR西日本 (n.d.). 「地震の場合」 https://www.westjr.co.jp/company/action/service/safety_transport/earthquake/ (最終閲覧 2024年10月7日).
- 庵功雄 (2021). 「してあげる、ではなく私自身のためにする。『やさしい日本語』に学ぶ多様性を育む方法 (2021年11月25日)」株式会社リクルート, https://www.recruit.co.jp/blog/guesttalk/20211125_2942.html (最終閲覧 2024年10月7日).
- 稲垣信哉・鈴木渉 (2011). 「英語コミュニケーション能力の「素地」と「基礎」: 第二言語習得の熟達化理論に基づいて」『小学校英語教育学会紀要』11, 19-24.
- 金井昌信・片田敏孝 (2015). 「“児童生徒の主体的な学び”を重視した防災教育の提案」『日本災害情報学会第17回研究大会予稿集』86-87.

3週間の「やさしい日本語」の学びを通した日本人学生の他者への貢献度に対する認識

- 気象庁 (n.d.). 「日本付近で発生した主な被害地震 (平成8年以降)」 <https://www.data.jma.go.jp/eqev/data/higai/higai1996-new.html> (最終閲覧 2024年10月7日).
- 近藤有美・川崎加奈子 (2015). 「留学生を情報弱者たらしめるものの実態—留学生による防災情報収集活動での事例の分析—」『言語文化教育研究』13, 118-133.
- 佐藤和之 (2020). 「「 」の付いた「やさしい日本語」の目的と使い方 ～外国人も日本人も理解する外国語であるということ～」『国際文化研修2020夏』108, 46-49.
- 政府広報オンライン (2022). 「被災地を応援したい方へ 災害ボランティア活動の始め方 (2022年12月20日)」 <https://www.gov-online.go.jp/useful/article/201909/4.html> (最終閲覧 2024年10月7日).
- 総務省消防庁 (n.d.). 「4. 「自助」「共助」「公助」」 <https://www.fdma.go.jp/relocation/e-college/cat63/cat39/cat22/4.html> (最終閲覧 2024年10月7日).
- 高橋美能 (2016). 「留学生と日本人学生の間に多文化共生の関係性を促進する方策—国際共修授業の事例考察を基に—」『留学生交流・指導研究』19, 45-58.
- 轟木靖子・山下直子 (2021). 「「やさしい日本語」を使った防災チラシの作成について—日本人学生の活動の分析—」『香川大学教育学部研究報告』5, 69-76.
- 内閣府 (2024). 「令和6年版防災白書」 <https://www.bousai.go.jp/kaigirep/hakusho/r06/> (2024年7月31日) (最終閲覧 2024年10月7日).
- 長谷川頼子・井上里鶴 (2021). 「大学生は「やさしい日本語」講義をどう受けとめたか—オンデマンド型授業後の自由回答アンケートから—」『敬愛大学国際研究』34, 特集「オンライン授業を通した教育の可能性」敬愛大学国際学部, 17-34.
- 弘前大学人文学部社会言語学研究室 (2013). 『(増補版)「やさしい日本語」作成のためのガイドライン』
- 宮城徹・花蘭悟・中井陽子 (2014). 「協働による防災学習—留学生に対する4つの実践からの考察—」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』40, 201-217.
- 山田悦子 (2021). 「「やさしい日本語」による市民との交流を取り入れた多文化クラスの活動」『メディア・コミュニケーション研究』74, 45-57.

謝辞

本授業を履修した学生の皆様のご協力に心より感謝申し上げます。